

京都府埋蔵文化財情報

第128号

京都府内出土の輸入陶磁器 -----	伊野近富 -----	1
研究ノート 大川遺跡出土特殊扁壺について -----	竹村亮仁 -----	11
第130回埋蔵文化財セミナー		
「京都『交流』の考古学－縄文・弥生・古墳時代の交流史－」		
シンポジウムの記録 -----	岡村美知子 --	19
平成26年度発掘調査略報 -----		23
14. 久々相遺跡第12次		
平成27年度発掘調査略報 -----		24
1. 寺町旧域・法成寺跡		
2. 山田黒田遺跡第4次		
3. 女布北遺跡第7次		
長岡京跡調査だより・124 -----		28
現地公開状況(平成27年7月～10月) -----		30
普及啓発事業(平成27年7月～10月) -----		31
センターの動向(平成27年7月～10月) -----		33

2015年12月

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

京都府内出土の輸入陶磁器

伊野近富

1. はじめに

京都府出土の輸入陶磁器については、個別の研究はあるものの、総体を知ることができる資料は少ない。国立歴史民俗博物館は報告書などに紹介された資料を集成したが、京都府では1923年（史蹟名勝天然記念物報告4）から1999年まで182件であった。1994年に京都府立丹後郷土資料館が京都府北部の輸入陶磁器の展覧会を開催した。ここでは122件集成された。

今回は、公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターが発足して、調査報告が始まった1982年から2007年までの掲載資料183件を一覧表にまとめた。当調査研究センターが発足して今年で35年目であるが、このうち25年分とやや短い、京都府内における輸入陶磁器の出土傾向は把握できると考え、まとめたものである。

2. 一覧表作成基準

今回集成した輸入陶磁器の時代は平安京造営以降の古代から中世に限定した。ほとんどは中国製品で、白磁・青磁・青白磁など多種類があるが、他に東アジアの諸国、さらにはイスラム陶器もある。陶磁器は次の35種類に分類した。白磁は大宰府分類を一部使用した。なお、2001年までの資料には概要報告と本報告との重複したものもあるので、今回は本報告資料のみカウントした。

以下、分類を列挙すると1.白磁碗Ⅱ類、2.白磁碗Ⅳ類、3.白磁碗Ⅴ類、4.その他碗、5.白磁皿、6.白磁口はげ皿、7.白磁端反り皿、8.白磁高台挟り皿、9.白磁合子、10.白磁壺、11.青白磁小壺、12.青白磁合子、13.青白磁碗・杯・皿、14.越州窯青磁、15.龍泉窯青磁碗画花文類、16.龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗、17.龍泉窯青磁蓮弁文碗、18.龍泉窯青磁幅広蓮弁文碗、19.龍泉窯青磁細蓮弁文碗、20.龍泉窯青磁雷文帯碗、21.龍泉窯青磁見込み印花文碗、22.龍泉窯青磁無文碗、23.龍泉窯青磁皿、24.龍泉窯青磁稜花皿、25.龍泉窯青磁壺、26.龍泉窯青磁杯・盤、27.龍泉窯青磁香炉、28.同安窯青磁碗、29.同安窯青磁皿、30.青磁生産地不明、31.天目茶碗、32.緑釉・褐釉・黄釉、33.高麗・朝鮮王朝、34.青花碗、35.青花皿である。

3. 分類基準の詳細

分類基準を詳しく説明すると、1は小さな玉縁口縁部で体部はやや丸みを帯びる。華北の定窯や邢窯などの製品である。2は大きな玉縁口縁部。生産地は中国南部福建省。3は直線的な口縁部で先端を外側に小さく折り曲げた、いわゆる折縁である。生産地は中国南部福建省。4は1～3以外の碗で、11世紀はじめに特徴的に現れた体部を縦方向に膨らみを入れたⅪ類や直口のⅨ類などが含まれる。5は以下の皿以外である。多くは平安時代後期から鎌倉時代である。6は口縁端部内面の施釉をぬぐって露胎としたもので、大宰府分類ⅢⅨ類である。鎌倉時代中期から室町時代はじめである。7は16世紀前半の特徴的な皿である。小野分類のE群である。8は15世紀の

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
87	長岡京跡右京第349・367次	G51				1					1					1																							
88	平安京左京一条二坊十町	G52													3	1	3						4	2															
89	長岡京跡右京第411次	G53				1																	1																
90	植物園北遺跡第11次	G54	1	1																																			
91	桜内遺跡	G54	2	1																																			
92	天若遺跡	H20																				1																	
93	八木城跡第2次	G56			1			1													1																	3	
94	八木嶋遺跡	G56	2	1												1								2	1														
95	長岡京跡右京第367・394次	G57	1																																				
96	大島東遺跡	G58																			1																		
97	平安京跡・旧二条城跡	G59																																		1	1	2	
98	長岡京跡左京第286・304・313・317次	G61	1														1																						
99	八木城跡第2・3次	G62			4	5		3		1					2	1	3			2	2	3	3		1			1				1		9	7				
100	七百石遺跡	G62			1																		2																
101	竹野遺跡	G64													1		1						2																
102	宇治市街遺跡	G64																				1																	
103	引地遺跡	G66																							1												1		
104	名神高速道路関係遺跡平成6年度	G69	1																																				
105	近畿自動車道敦賀線関係遺跡平成6・7年度(池下城支城跡・堀古墳)	G70												1																									
106	長岡京跡右京第498次	G70																																		1			
107	木津地区所在遺跡平成7年度	G73																					1																
108	名神高速道路関係遺跡	G74	1																																				
109	大俣城跡	G75			2			14																		1											12	5	
110	大俣城跡A地区中世墓	G75	1		1																																		
111	府道八幡木津バイパス関係遺跡田辺城跡・下層	G77				1		2																															
112	長岡京跡右京第547次	G77				1																																	
113	国営農地関係遺跡平成8年度シミズ谷城跡	G79			1	1														4	2			1	6		2								1	8			
114	百々遺跡	H24	4	1	2	1	1				1				2		1						1																
115	棕ノ木遺跡	G81	3		2		2				1		1																							1			
116	太田遺跡第5次	G82			1	1										1	1									1													
117	横枕遺跡第2次	G82													2	1	2							2															
118	別荘遺跡	G83	1		1							1				1																							
119	棕ノ木遺跡	G85	1	11	3	1	2	2							3	2	1						2	2								1	1						
120	下植野南遺跡	H25		5	1																		1	3															

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35			
160	池上遺跡第13・18次	G112	1																																				
161	長岡京跡右京第781次・神足遺跡	G112																				1																	
162	木津川河床遺跡第16次	G113	4																				1																
163	門戸古墳群	G113			1																																		
164	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成15年度	G114																				1		1												1			
165	観音寺遺跡平成15年度	G115	1		1													1				1	1	1															
166	諸畑遺跡第3次	G115														4																							
167	棕ノ木遺跡第7次	G115									1												1																
168	内里八丁遺跡第20次	G116	1	1														1										1						1					
169	片山遺跡第2・3次	G116	13	2	2		1					2	1			4	2				1	4			1			1	1				1						
170	長岡京跡右京第830次・上里・井ノ内遺跡	G117																		1			3																
171	椿井遺跡第1・2次	G117			1																		1																
172	大垣・一の宮・難波野(条里制)遺跡	G118	3	4		1				1													2																
173	岡ノ遺跡第3次	G118			1												1																						
174	長岡京跡右京第856次・友岡遺跡	G118	5										1			1																							
175	京都第2外環状道路関係遺跡平成16年度	G118			2								1			1																							
176	宮津城跡第12次	G119																			1																		
177	史跡名勝笠置山	G119																				1		1	1					1									
178	国営農地再編整備事業「亀岡地区」関係遺跡平成16年度	G120																					3																
179	難波野条里制・難波野遺跡平成17年度	G121	2	5	1	1	2				1												5	1											1				
180	岡ノ遺跡第4次	G121						1								2																							1
181	野条遺跡第11次・室橋遺跡第4次	G122		1																																			
182	長岡京跡右京第889次・井ノ内遺跡	G122		1																																			
183	木津川河床遺跡平成18年度	G122				1																	1																
			29	228	64	85	49	13	30	3	6	8	10	14	13	13	40	60	23	8	20	9	17	111	26	17	6	17	3	13	16	2	2	20	4	52	38		

※Gは概報、Hは報告集のことである。

表2 輸入陶磁器一覽表(2)

番号	点数	報告年度	市町村	番号	点数	報告年度	市町村	番号	点数	報告年度	市町村	番号	点数	報告年度	市町村
1	1	1982	福知山市	47	12	1989	京都市	93	6	1994	南丹市	139	3	2001	八幡市
2	3	1982	木津川市	48	1	1989	長岡京市	94	7	1994	南丹市	140	1	2001	精華町
3	1	1982	南丹市	49	4	1989	大山崎町	95	1	1994	大山崎町	141	4	2001	久御山町
4	1	1982	京都市	50	1	1989	京丹後市	96	1	1994	綾部市	142	2	2002	京田辺市
5	5	1983	与謝野町	51	1	1989	綾部市	97	4	1994	京都市	143	3	2002	亀岡市
6	1	1983	亀岡市	52	5	1989	舞鶴市	98	2	1995	京都市	144	4	2002	八幡市
7	2	1983	亀岡市	53	15	1990	綾部市	99	48	1995	南丹市	145	7	2002	京田辺市
8	1	1983	八幡市	54	5	1990	綾部市	100	3	1995	綾部市	146	1	2002	久御山町
9	2	1983	福知山市	55	4	1990	京丹後市	101	4	1995	京丹後市	147	16	2002	精華町
10	2	1984	長岡京市	56	1	1990	与謝野町	102	1	1995	宇治市	148	55	2003	久御山町
11	1	1984	舞鶴市	57	1	1990	宮津市	103	2	1995	福知山市	149	7	2003	京丹後市
12	3	1984	福知山市	58	3	1990	京田辺市	104	1	1996	京都市	150	9	2003	宮津市
13	67	1984	福知山市	59	1	1990	八幡市	105	1	1996	舞鶴市	151	1	2003	福知山市
14	1	1984	福知山市	60	5	1990	向日市	106	1	1996	長岡京市	152	1	2003	福知山市
15	1	1984	福知山市	61	2	1991	大山崎町	107	1	1996	木津川市	153	5	2004	久御山町
16	3	1984	福知山市	62	1	1991	大山崎町	108	1	1997	京都市	154	2	2004	南丹市
17	1	1984	福知山市	63	5	1991	大山崎町	109	34	1997	舞鶴市	155	1	2004	南丹市
18	1	1984	福知山市	64	3	1991	綾部市	110	2	1997	舞鶴市	156	5	2004	城陽市
19	12	1984	亀岡市	65	10	1991	京田辺市	111	3	1997	京田辺市	157	9	2004	精華町
20	1	1985	長岡京市	66	3	1991	長岡京市	112	1	1997	長岡京市	158	10	2004	宮津市
21	2	1985	向日市	67	3	1991	向日市	113	26	1997	京丹後市	159	9	2004	亀岡市
22	7	1985	八幡市	68	1	1991	宮津市	114	14	1998	大山崎町	160	1	2004	南丹市
23	3	1985	木津川市	69	3	1991	与謝野町	115	10	1998	精華町	161	1	2004	長岡京市
24	4	1986	綾部市	70	2	1991	京丹後市	116	5	1998	亀岡市	162	5	2005	八幡市
25	4	1986	与謝野町	71	2	1991	長岡京市	117	7	1998	京丹後市	163	1	2005	舞鶴市
26	1	1986	八幡市	72	13	1991	京都市	118	4	1998	京丹後市	164	3	2005	亀岡市
27	1	1986	大山崎町	73	1	1991	京都市	119	32	1998	精華町	165	6	2005	福知山市
28	10	1986	木津川市	74	1	1991	南丹市	120	10	1999	大山崎町	166	4	2005	南丹市
29	6	1986	福知山市	75	1	1992	京都市	121	6	1999	八幡市	167	2	2005	精華町
30	7	1987	宇治市	76	58	1992	亀岡市	122	4	1999	精華町	168	5	2005	八幡市
31	2	1987	綾部市	77	2	1992	福知山市	123	2	1999	京田辺市	169	36	2005	木津川市
32	7	1987	綾部市	78	2	1992	福知山市	124	2	1999	八幡市	170	4	2006	長岡京市
33	1	1987	京丹後市	79	18	1992	綾部市	125	1	1999	亀岡市	171	2	2006	木津川市
34	12	1987	八幡市	80	1	1992	京田辺市	126	1	2000	京都市	172	11	2006	宮津市
35	7	1987	木津川市	81	1	1992	京都市	127	1	2000	京丹後市	173	2	2006	福知山市
36	28	1988	京都市	82	1	1992	京都市	128	3	2000	京都市	174	7	2006	長岡京市
37	9	1988	福知山市	83	3	1992	木津川市・精華町	129	8	2000	京丹後市	175	4	2006	長岡京市
38	3	1988	福知山市	84	3	1992	綾部市	130	7	2000	京丹後市	176	1	2006	宮津市
39	1	1988	福知山市	85	3	1992	長岡京市	131	11	2000	与謝野町	177	4	2006	笠置町
40	1	1988	福知山市	86	1	1992	向日市	132	3	2001	舞鶴市	178	3	2006	亀岡市
41	1	1988	福知山市	87	3	1992	大山崎町	133	4	2001	八幡市	179	19	2006	宮津市
42	1	1988	福知山市	88	13	1993	京都市	134	2	2001	京田辺市	180	4	2007	福知山市
43	1	1988	木津川市	89	2	1993	長岡京市	135	2	2001	精華町	181	1	2007	南丹市
44	1	1988	木津川市	90	2	1993	京都市	136	2	2001	八幡市	182	1	2007	長岡京市
45	4	1988	八幡市	91	3	1993	与謝野町	137	12	2001	与謝野町	183	2	2007	八幡市
46	5	1988	綾部市	92	1	1994	日吉町	138	15	2001	亀岡市				

特徴的な皿である。9は合子の身と蓋と両方を含む。10は四耳壺も含む。11～13は景德鎮窯もしくは景德鎮窯系である。11は小壺の身だけで、蓋の判別はつけていない。12は白磁と同様に身と蓋と両方を含む。13は椀はほとんどない。14は器形をとわず、越州窯青磁とした。1点のみ、長沙窯のものもある。15～27は中国浙江省龍泉窯もしくは龍泉窯系である。日本でもっとも多く出土する窯製品である。15は体部内面にヘラで画花文(花文を描き、ところどころヘラで区切りを入れているもの)を施したもののや、雲水文を描いたものなどである。12世紀後半から13世紀までである。16は体部外面に蓮弁を半肉彫りし、蓮弁の中央には鎬しのぎという、縦方向に稜を施したものである。17はその鎬を省略したものである。凹凸のある半肉彫りは徐々に廃れ、平板なものとなる。18は体部外面に施した蓮弁が幅の広いもので、粗くヘラ描きされたものである。14世紀から15世紀前半のものである。19は体部外面に施した蓮弁の幅が狭いもので、15世紀後半から16世紀

に流行るものである。20は体部外面上半にヘラで描いた四角に渦巻状のものを特徴とする。21は内面見込み(内面底部)に花文を印刻したものである。22は文様が認められないもの、あるいは破片のため文様が残っていないものも含んでいる。23はヘラにより流麗に雲水文などを描いた皿である。12世紀後半から13世紀はじめにかけてのものである。24は口縁部を輪花状にしたものである。15世紀に多い。25は壺や梅瓶^{めいびん}を含む。26は杯や盤(大皿)で、見込みに半肉彫りの双魚文を施したのものもある。13世紀から15世紀である。27は香炉であるが、ほとんど筒型のもので、火舎型のもの確認されなかった。また、蓋は判別できなかった。28・29は中国南部福建省の同安窯および同安窯系である。文様形態は龍泉窯をまねている。違いは同安窯製品は櫛状工具を器面に突き刺し、流麗な龍泉窯の文様をまねている。12世紀後半から13世紀はじめである。30は龍泉窯製品より胎土が悪く、釉も発色が悪いものである。一部には龍泉窯製品もあると思われるが、判別できないものである。31は中国福建省建窯の天目茶碗である。鉄釉のものである。15世紀以降である。32は緑釉・褐釉・黄釉製品である。多くは盤(大皿、中国では洗と呼ぶ)であるが、褐釉や黄釉の壺もある。中国南部のものである。まれに、三彩盤があるが、今回は1点のみである。33は高麗青磁碗・皿・梅瓶、朝鮮王朝碗・皿・梅瓶がある。なお、高麗の象嵌青磁や朝鮮王朝の粉青沙器も稀にある。34・35は日本の茶人が染付けと呼んだ青花である。元染付けも稀に出土するが、今回は確認できなかった。すべて、明代末のものである。

4. 点数の傾向

報告書に掲載された輸入陶磁器の点数は1068点であった。内訳は表1のとおりである。さらに、京都府内の旧国名である丹後・丹波・山城の3地域での点数も表2でまとめた。

まず、白磁515点(48.2パーセント)、龍泉窯青磁356点(33.3パーセント)、青白磁37点(3.5パーセント)と、3種類で908点で全体の85パーセントを占める。

時代別の点数をみると、12世紀はじめから13世紀はじめの碗形態である2.白磁碗Ⅳ類が228点で21.3パーセント、3.白磁碗Ⅴ類が64点で6.0パーセント、合計27.3パーセントとほぼ4分1を占める。同時期の28.同安窯青磁碗13点(1.2パーセント)を含めると28.5パーセントである。同時期の皿形態である5.白磁皿が49点(4.6パーセント)、29.同安窯青磁皿が16点(1.5パーセント)であるので、合計6.1パーセントである。碗と皿の比率はほぼ5対1である。

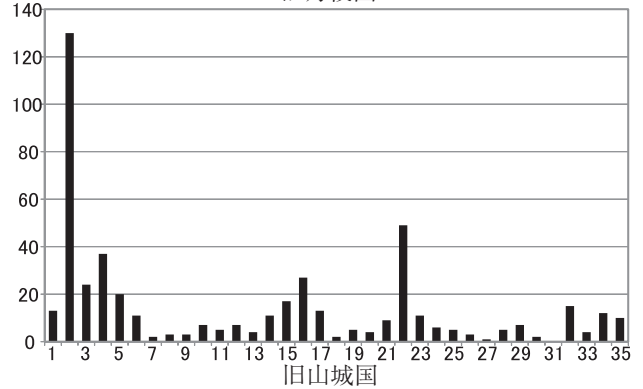
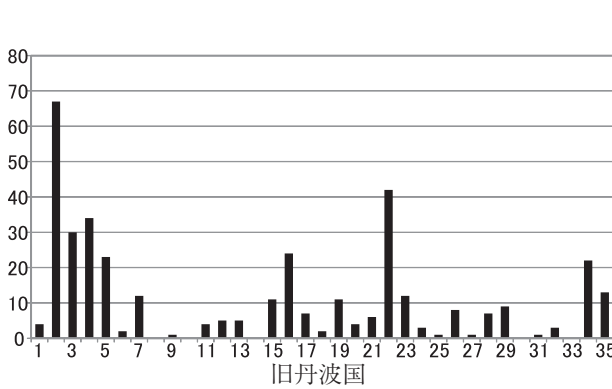
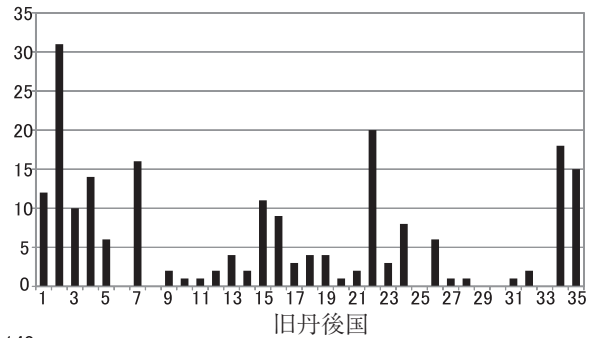
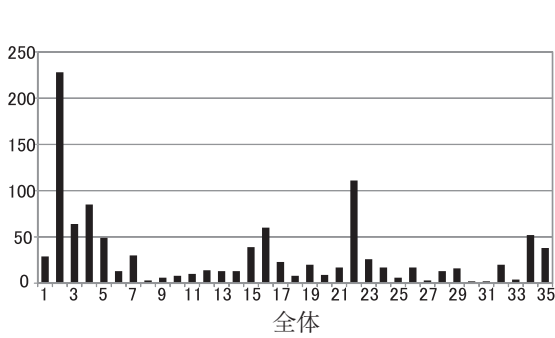
12世紀末から13世紀にかけての15.青磁龍泉窯碗Ⅰ類が39点(3.7パーセント)、続いて13世紀の16.龍泉窯青磁鎬蓮弁文碗が60点(5.6パーセント)、合計9.3パーセントと比率が激減する。13世紀後半から14世紀前半の6.白磁口はげ皿が13点(1.2パーセント)であるので、合計10.5パーセントである。前時期の3分1に激減する。碗と皿の比率はほぼ8対1である。

14世紀を中心とした17.龍泉窯青磁蓮弁文碗が23点で2.1パーセント、18.龍泉窯青磁幅広蓮弁文碗が8点で0.7パーセント、一部15世紀前半に及ぶ20.龍泉窯青磁雷文帯碗が9点で0.8パーセントと3種類で3.7パーセントとさらに減る。

15世紀後半から16世紀前半にかけての白磁碗は認められない。小破片で確認できないのかも

表3 全体・旧国別出土点数表

白磁					青白磁		青磁															鉄釉		雑釉		青磁他		青花								
龍泉窯															同安窯																					
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35		
椀Ⅱ	椀Ⅳ	椀Ⅴ	その他椀	皿	口はげ皿	端反皿	高台挟り皿	合子	壺	小壺	合子	椀・杯・皿	越磁	椀Ⅰ	鎗蓮弁文椀	蓮弁文椀	幅広蓮弁文椀	細蓮弁文椀	雷文帯椀	見込み印花文	無文椀	皿	稜花皿	壺	杯・盤	香炉	同安窯椀	同安窯皿	生産地不明	天日茶碗	褐釉・緑釉・その他	高麗・朝鮮	椀	皿		
29	228	64	85	49	13	30	3	6	8	10	14	13	13	40	60	23	8	20	9	17	111	26	17	6	17	3	13	16	2	2	20	4	52	38		
12	31	10	14	6	0	16	0	2	1	1	2	4	2	12	9	3	4	4	1	2	20	3	8	0	6	1	1	0	0	1	2	0	18	15		
4	67	30	34	23	2	12	0	1	0	4	5	5	0	11	24	7	2	11	4	6	42	12	3	1	8	1	7	9	0	1	3	0	22	13		
13	130	24	37	20	11	2	3	3	7	5	7	4	11	17	27	13	2	5	4	9	49	11	6	5	3	1	5	7	2	0	15	4	12	10		
																																	全体	丹後	丹波	山城



知れないが、いずれにしてもほとんどないといってよい。白磁皿は7.白磁端反り皿が30点（2.8パーセント）、8.白磁高台挟り皿が3点（0.3パーセント）で合計3.1パーセントである。青磁は24.龍泉窯青磁稜花皿が17点（1.6パーセント）なので、合計4.7パーセントである。

16世紀から17世紀初めの34.青花椀が52点（4.9パーセント）で、35.青花皿が38点（3.6パーセント）で、合計8.5パーセントである。

以上、12世紀から16世紀前半までの出土比率は12世紀から13世紀初めがもっとも多く、2・3・5・28・29の椀と皿で34.6パーセントである。12世紀末から13世紀にかけての6・15・16の出土比率は10.5パーセントである。14世紀を中心とした時期の17・18・20の出土比率は3.7パーセントである。15世紀後半から16世紀前半にかけての出土比率は4.7パーセントである。16世紀から17世紀はじめの7・8・24の出土比率は8.5パーセントである。時期不明の白磁4.その他椀85点（7.9パーセント）や青磁22.龍泉窯青磁無文椀111点（10.4パーセント）は除いている。したがって、出土比率の傾向を知る資料であると考えれば、出土のピークは日宋貿易の時期と符合する。その後3分1に減り、14世紀から16世紀前半はピーク時の7～9分1となる。それが、16世紀から17世紀はじめには4分1と増加する。また、はじめは椀と皿の比率はほぼ5対1であるのに対して、新しい時期になると1.4対1となり、皿の比率が増加する。

5. 地域の特徴

旧国単位に出土点数の特徴をみると、白磁椀Ⅳ類とⅤ類の比率は、全体が228対64なので、およそ3～4対1である。丹後は31対10で3対1、丹波は67対30で2対1、山城は130対24で6対1となる。したがって、旧山城国における白磁椀Ⅳ類の出土比率が高いことがわかる。逆に言えば、旧丹波国では白磁椀Ⅴ類の比率が高いといえよう。これは何に由来するのだろうか。まず、入手経路で考えよう。陶磁器の一般的なルートは瀬戸内海から淀川を遡り、あるいは山陽道を使い、京都へ運ばれたのであろう。荘園からの貢納物資は各地から京都へ運ばれ、京都で買い求めた物資は帰りの便で、各地に運ばれたらう。そうであれば、陶磁器の種類の出土比率は変わらないこととなる。旧山城国と旧丹後国が同じ傾向なのに旧丹波国だけが違うのは、別の経路があったのではなかろうか。それは、大輪田泊から加古川を遡って、由良川に至る道である。この道は、弥生時代から土器などの物資の道として知られているが、中世でも想定できるのではなかろうか。大輪田泊は平清盛が修復した港である。宋船もやってきた主要港で、一時期は近隣に福原京が置かれた地でもある。ここに、陸揚げされた陶磁器を取捨選択した結果が、旧丹波国では白磁椀Ⅴ類の比率が高い結果となったのではなかろうか。

次に、同安窯の椀と皿の出土点数を見てみよう。旧丹後国では1点、旧丹波国では16点、旧山城国では12点である。旧丹後国での出土点数が極端に少ないことがわかる。これは、京都で買い求める際に、取捨選択されたと考えることもできるが、先に想定したように、ルートの違いと想定することも可能である。すなわち、日本海ルートの存在である。大宰府や博多が中国との貿易の拠点であったことは知られているが、通常ならば、瀬戸内海ルートとなるが、いまひとつ日本海ルートも想定できる。もし、但馬や近江北部や北陸が同じ傾向なら、このルートの存在を肯定できよう。この点については今後の検討課題である。

6. おわりに

今回は、輸入陶磁器の一覧表を提示し、出土傾向について考えてみた。この表に載らない事例もたくさんあるので、あくまでも出土傾向を知るといいう目的で利用していただきたい。1点も出土していないものもある。たとえば、旧丹波国では白磁壺は1点も出土していないが、今後ともそうではなく、発掘成果の限界を示しているのである。これは、椀皿に比べて壺が全体的に少なく、各地の有力者にとって持つことのステータスとして少数存在したと考えたほうが妥当である。また、高麗・朝鮮王朝の陶磁器も同じである。2007年までのデータでは、旧山城国でしか出土していないが、2015年時点では旧丹後国でも出土している。あくまでも、出土点数の多寡に注目して使っていただきたい。今後、京都府内における輸入陶磁器の研究が深まることを願い、この小文を終える。

(いの・ちかとも＝当調査研究センター調査課第3係副主査)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

大川遺跡出土特殊扁壺について

竹村亮仁

1. はじめに

大川遺跡は京都府舞鶴市、由良川左岸に位置する遺跡である（第1図）。平成24年から3年間の調査を行い、弥生時代から室町時代までの遺構を検出した最終年度にあたる平成26年度の調査において、特殊扁壺が出土した。特殊扁壺は、京都府下で5例目、京都北部においては3例目の出土例で全国的に見ても珍しい須恵器である。

特殊扁壺はこれまで出土例の少なさから型式学的研究をはじめとする検討が行われてこなかった。近年では、鈴木一有氏によって特殊扁壺に一定の評価がなされた（浜松市1998）。その評価についても特殊扁壺Ⅰ類と呼ばれるものに限ったものであった。

本稿では、これまでの研究史をまとめるとともに、大川遺跡出土の特殊扁壺の紹介、集成及び編年について検討を加えるものである。



第1図 大川遺跡位置図

2. 特殊扁壺の研究史

特殊扁壺はその形から「異形須恵器」として古くから紹介されているが、出土例の少なさなどから、検討されることが少なかった。個別検討を最初に行ったのは、山田邦和氏であり、氏は柄の有無によって、「無柄特殊扁壺」をⅠ類、「有柄特殊扁壺」をⅡ類と分類した。その分布は、Ⅰ類が東日本に、Ⅱ類が西日本を中心に分布するとし、その境は京都府南部から滋賀県にあるとした。さらにその原型を朝鮮半島に求めている。1992年の段階では16例が確認されており、その中で時期が推定できるものからⅠ類をTK10型式段階からMT21型式段階、Ⅱ類をTK10型式段階からTK209型式段階とし、ごく限られた時期に製作されたと指摘した。その用途については、明言はしていないが、柴田勇夫、北田栄造の考察を紹介している。それによると柴田は「特殊扁壺Ⅰ類について、さし渡した棒を回転させ、中に入れた供物を下へ落とす容器である」、北田は「特殊扁壺の柄は本来は節をくりぬいた竹であり、液体を流す機能を持っていた」と推定している（山田1992）。

1993年の兵庫県箱塚古墳群の報告では、1つの墳丘に2基の横穴式石室をもつこと。そして、副葬品が同じ群集墳においても最も多い点が指摘された(兵庫県1993-2)。この指摘に関しては、醍醐1号墳(京都府)、向井原古墳(香川県)、箱塚4号墳の3基の古墳に共通するものの、全体に当てはまるものかは検討が必要である。

次いで、1998年に鈴木氏は、宇藤坂古墳群(静岡県)の発掘調査において出土した特殊扁壺Ⅰ類について、集成及び文様構成から形式学的分類を加えた。鈴木氏は文様帯から特殊扁壺Ⅰ類を第Ⅰ群から第Ⅲ群にした。第Ⅰ群は波状文を持つもので、共伴遺物からTK43型式段階からTK209型式段階併行期とし、次に波状文がなく、列点文が施される一群を第Ⅱ群とした。文様帯の変形など一群を第Ⅲ群とした。特殊扁壺Ⅰ類は共伴遺物、文様帯の変化から年代差を示すとし、概ねTK43型式段階からTK209型式段階までの限定的な時間幅のなかで作成されたものとした。さらに用途について液体を注ぐ動作に使用され、「葬送儀礼において限定的に使用されたもの」とし、「顕著な使用痕跡が認められない」ことから象徴的な意味合いを指摘した(浜松市1998)。

2013年に和田理啓氏は山崎上ノ原第1遺跡(宮崎県)の報告書のなかで、出土した特殊扁壺Ⅰ類の製作場所や用途などについて検討を行った。和田氏は宮崎県から出土したことで、「近畿から



第2図 甲塚古墳出土埴輪 (下野市2014から転載)

東海に著しく偏るこの遺物を使用した祭祀自体は列島の広範囲で行われていた可能性」を指摘した(宮崎県2013)。

これまで、大川遺跡を除く遺跡で26例出土している特殊扁壺であるが、個別検討したものは以上である。これまでの研究史をまとめると次のようなことがいえる。

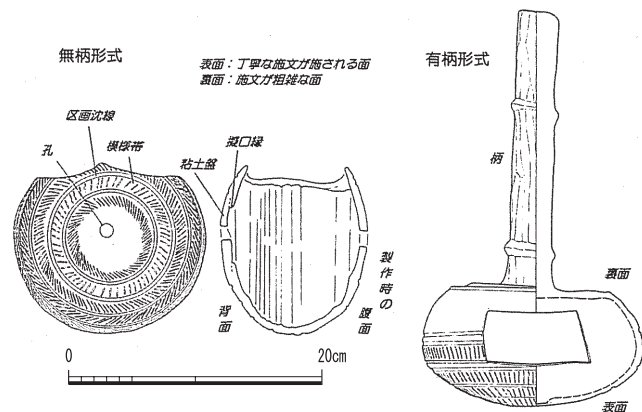
第1に製作時期は、山田、鈴木両氏に若干の差異があるが、概ね6世紀後半から7世紀初頭という限られた時期に限定されること。そして、第2に祭祀に用いられるものであり、第3に内部に液体を入れる容器であることにまとめることができる。

栃木県・甲塚古墳に樹立されていた女性埴輪に特殊扁壺を手にしてしまうと考えられるもの(第2図)があり、観察すると、壺部に棒状体が貫通しているかのように、表現されている。この女性埴輪が手にしているものは、I類に属する特殊扁壺と考えられる。特殊扁壺の出土例は、現状で群馬県が北限であることを考えると興味深い事例と言える(下野市2014)。

3. 大川遺跡出土の特殊扁壺

大川遺跡出土の特殊扁壺は、下層確認のためのトレンチ壁面、包含層から出土した。残存高7.8cm、直径12.6cmを測る(表3-27)。報告するにあたって、特殊扁壺の表裏など各種名称については、鈴木氏が検討したものを採用し、柄のつく側を裏面、柄のつかない側を表面とする(第3図)。

文様は、表裏面全体に施されており、表面から3/4の範囲にかけて第1次調



第3図 特殊扁壺名称 (浜松市1998から転載)

整としてカキメを施し、ヘラにより斜線文などが施される。斜線文はカキメが認められない裏面にも施されている。側面には斜線文は認められず、カキメのまま、部位によってナデ消されている。口縁端部の表面側には粗雑な沈線が1条認められる。表面の中央には、文様は認められない。この無文帯については箱塚4号墳、醍醐1号墳の特殊扁壺にも認められる。棒を突き刺したと推定されるI類や、勝野(滋賀県)出土の例から考えると、棒が壺を貫通しているイメージの中で、突出部が無文として表現されている可能性が考えられる。

山田編年に当てはめると特殊扁壺II類、柄付特殊扁壺にあたる。直径は12cm程度で中間ほどのサイズである。本来、付属していた柄は欠落しているが、勝野や土壇原6号墳(愛媛県)の出土例の柄部が中空なものは、柄と壺部の内側の空間が一体であり、大川遺跡の特殊扁壺は柄の剥離面に孔が認められないことから中空ではないタイプの柄であり、向井原古墳(香川県)出土のものと同様な柄であったと考えられる。口縁部は楕円形で、向井原古墳、塚穴古墳(徳島県)の例とは異なる。



第4図 特殊扁壺分布図 (宮崎県2013から転載・一部追記)

表1 出土地一覧

型式	No.	遺跡名
特殊扁壺Ⅰ類	1	富岡72号墳
	2	恒川遺跡
	3	願成寺2号墳
	4	衣原1号窯
	5	宇藤坂A5号墳
	6	茶屋辻A4号墳
	7	向山6号墳
	8	山奥遺跡
	9	大仏山古墳群
	10	平林7号墳
	11	穴太剣込古墳群
	12	高山12号墳
	13	今井古墳
	14	隼上り1号墳
	15	塚原4号墳
	16	百間川原尾島遺跡
	17	山崎上ノ原第1遺跡
特殊扁壺Ⅱ類	18	勝野
	19	醍醐1号墳
	20	箱塚4号墳
	21	道東古墳
	22	中西山3号墳
	23	向井原古墳
	24	塚穴古墳
	25	土壇原6号墳
	26	上三草7号墳
	27	大川遺跡

4. 分布

これまで全国で出土した特殊扁壺は、Ⅰ類17例、Ⅱ類10例、計27例が確認されている(第4図・表1)。1992年の山田氏の報告では、京都、滋賀を境に東西日本で分布は分かるとされた。しかし、山田氏が分布を示した後、新たに11例が見つかったことでその分布については検討が必要となった。それまで明確な境があると考えられていたが、岡山県、宮崎県で特殊扁壺Ⅰ類が出土しており、山田氏の指摘の限りではない。Ⅰ類については分布に東西日本の区切りはなく、日本各地で作られていたと考えられる。特殊扁壺Ⅱ類であるが、大川遺跡で出土したが、山田氏の研究からはみ出るものではなく、東日本での出土例はないことから西日本を中心に製作されていたものと考えられる。さらに畿内においては塚原4号墳(大阪府)のみで、ほかに例がない。須恵器生産の中心地でもある畿内で、出土例が少ないことは何を示すのであろうか。畿内以外にも出雲や下野などある意味中心的な地域ではその出土例は少ないことも指摘

できる。

さらに、鈴木氏は特殊扁壺Ⅰ群の各群の分布について、現状での指摘をしている。Ⅰ類第Ⅰ群は、東海地方東部、Ⅰ類第Ⅱ群は東海地方西部、Ⅰ類第Ⅲ群は、近畿地方北西部に分布の中心があるとしている。Ⅱ類については両群ともにその分布域に境は認められず、先に指摘したように西日本、中でも、京都、滋賀、兵庫、岡山、高知を除いた四国を中心として分布している。ただその出土数から、一概に分布域を判断することはできない。

5. 製作技法

これまでの研究で、提瓶と同じ技法で製作されたことはこれまでも指摘されており、異議はない。Ⅱ類の柄部、文様については若干の指摘ができる(表2)。

まず、柄が付属される面についてである。中実の柄のものは、充填面との逆の面に、柄をつける。勝野出土の例を見てみると、充填は行われていない。土壇原6号墳の特殊扁壺は実測図からの判別は難しいが、充填していないものと考えられる。さらに仮に上三草7号墳(兵庫県)出土の特殊扁壺がⅡ類に分類されるものであれば、表面には充填痕跡は認められず、裏面に口縁が向く。仮に柄が付属していたものならば中空の柄であったと推定できる。このことから、中空のものは、充填を行わず、柄をつける。その際に柄は、中実にせず、筒状の柄を付属させる。さらに柄の装飾である。多くは完全な形で残ってはいないが、基本は放射状にヘラケズリを施す。さらに壺部との接着面に段をつけるものとそうでないものがあり、これは特殊扁壺Ⅱ類の中でも小型のものにみられる。柄が中空か中実かについては、特殊扁壺Ⅱ類第Ⅰ群、Ⅱ群ともに認められることから、製作された時期全般を通じて作られていたものといえる。

文様であるが、大川遺跡出土の特殊扁壺Ⅱ類に認められる表面中央の無文帯であるが、この特徴は箱塚4号墳、醍醐1号墳の特殊扁壺Ⅱにも認められ、意図して無文にしていると考えられる。特殊扁壺Ⅰ類でも、孔の周辺を無文にする特徴が見受けられることから、形は異なるが、同じ意図をもって無文にしている可能性がある。さらに甲塚古墳の埴輪の意匠や、Ⅰ類の棒を孔に入れ

表2 文様一覧

番号	遺跡名	出土地	柄	口縁形状	口縁位置	表面	側面	裏面
18	勝野	古墳	中空	楕円	中央	斜線文	無文	斜線文
19	醍醐1号墳	古墳	中実	楕円	中央	斜線文	無文	無文
20	箱塚4号墳	古墳	中実	楕円	裏面寄り	斜線文	沈線/ヘラ描き	斜線文
21	道東古墳	古墳	中実	楕円	中央	無文	無文	無文
22	中西山3号墳	古墳	中実	楕円	中央	無文	無文	無文
23	向井原古墳	古墳	中実	四角形	中央	列点文	無文	斜線文
24	塚穴古墳	古墳	中実	四角形	中央	無文	無文	無文
25	土壇原6号墳	古墳	中空	楕円	中央	斜線文	沈線/ヘラ描き	斜線文
26	上三原7号墳	古墳		楕円	中央	斜線文	斜線文	斜線文
27	大川遺跡	包含層	中実	楕円	中央	カキメ/斜線文	沈線/カキメ	カキメ/斜線文

※番号は表2による

表3 特殊扁壺編年

		特殊扁壺Ⅱ類	
		第Ⅰ群	
	特殊扁壺Ⅰ類		
第Ⅰ群		第Ⅱ群	
第Ⅱ群		第Ⅲ群	
第Ⅲ群			

※1 特殊扁壺Ⅰ類は浜松市1998から転載

※2 番号は表2による

ていたと推定されていること、さらに勝野出土の例のように、突起をつけることは壺部を貫通させるようなイメージを連想させる。つまり、Ⅱ類の無文帯は本来、棒状のものを貫通させていた原型を簡易化させ、無文のみの意匠で表現したと考えられる。壺部全体の文様については、多くの個体で斜線文が認められる。これはⅡ類第Ⅰ群、第Ⅱ群ともに指摘できる。時期が新しくなると、文様が壺部全体から表面のみまたは無文と変化している。

6. 型式分類

特殊扁壺の編年であるが、これまでの研究からTK43型式段階からTK217型式段階に収まるもので、製作時期は短い。この短い時期の中で、製作年代を求めることは難しいが、Ⅱ類に属する特殊扁壺10例は幸いにも、大川遺跡を除く9例が墳丘からの出土であることから年代推定が可能である。

その形状は、口縁部は四角形と楕円形、柄部は中空とそうでないものなど、様々である。鈴木氏の型式分類を参考に型式分類してみると表3のようになる。特殊扁壺Ⅱ類には、波状文が施されている例は報告されていない。鈴木分類第Ⅰ群の特殊扁壺は、TK43型式段階からTK209型式段階の遺物とされ、Ⅱ類の同時期なものは勝野(表3-18)、醍醐1号墳(表3-19)、道東古墳(表3-21)、中西山3号墳(表3-22)である。これらのグループをⅡ類第Ⅱ群とする。このグループの多くが、文様が簡素化しており、無文、または一部に装飾が認められると考えられる。しかしながら、勝野、上三草7号墳(表3-26)はそれにあたらない。勝野出土の特殊扁壺は、第Ⅱ群の中でも古い段階にあたるのかもしれない。ただ、上三草7号墳のものは、まず特殊扁壺かどうかの検討が必要であろう。

箱塚4号墳(表3-20)、土壇原6号墳(表3-25)に関しては、共伴遺物からMT15型式段階併行期とされている。文様をみると箱塚4号墳のものは、列点文が細かく施されている。土壇原6号墳のものは、カキメが施されているものと考えられる。大川遺跡出土のものは、壺部全体にケズリ、カキメが細かく施されている点、残存高が約7cmとある程度のサイズを持つことから、Ⅱ類第Ⅰ群に属するMT15型式段階からTK10型式段階併行期のものと推定される。

7. まとめ

特殊扁壺Ⅱ類について検討を行い、製作技法において若干の指摘ができた。柄の接着面によって、柄が中空になるか中実になるか変化することがわかった。この違いについては、Ⅱ類第Ⅰ群、Ⅱ類第Ⅱ群ともにして製作されていることから時期や地域の問題ではないことがいえる。ただ中空の場合、内容物が液体とするならば、柄部まで液体が入ることになる。内容物を注ぐことが使用目的であるならば、柄まで液体が入ることは、容量は増すが、注ぐという点から考えると、現実的ではない。文様は特殊扁壺Ⅰ類のように共通の意匠があるものとはいえず、Ⅱ類第Ⅰ群はⅠ類と同様の意匠のもとで製作され、Ⅱ類第Ⅱ群ではその文様は簡素化するといえる。

Ⅰ類についても鈴木氏によって、行為の形骸化が指摘されていることから、特殊扁壺そのもの

が、副葬品としての意味合いが強くなったものと推定される。

今回、大川遺跡において特殊扁壺が出土したことから、本論を作成するに至った。特殊扁壺の出土例が少ないことから、今回の報告についても修正が必要になる可能性は高い。ただ、これまで、墳丘で出土していた特殊扁壺Ⅱ類が包含層から柄部はないもののほぼ完形で出土したことは、大川遺跡周辺に未確認の古墳の可能性と提瓶の出土も合わせて考えると河川を対象として宗教的行為も想定する必要がある。

(たけむら・かつひと = 当調査研究センター調査課第3係調査員)

参考文献

- 財団法人京都市埋蔵文化財研究所『醍醐1号墳発掘調査概報』昭和61年度 1986
- 兵庫県教育委員会『青野ダム建設に伴う発掘調査報告書(1)』兵庫県文化財調査報告第50冊 1987
- 山田邦和「須恵器特殊扁壺に関する覚書」(『考古学与生活文化』同志社大学考古学シリーズV) 1992
- 兵庫県教育委員会『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅲ』兵庫県文化財調査報告書第125冊 1993 - 1
- 兵庫県教育委員会『箱塚古墳群』兵庫県文化財調査報告第127冊 1993 - 2
- (財)浜松市文化協会『宇藤坂古墳群』1998
- 宮崎県埋蔵文化財センター『山崎上ノ原第1遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第224集 2013
- 下野市教育委員会『甲塚古墳発掘調査報告書 - 下野国分寺跡史跡整備に伴う関連調査 -』下野市埋蔵文化財調査報告第11集 2014

「京都『交流』の考古学－縄文・弥生・古墳時代の交流史－」 シンポジウムの記録

岡村美知子

平成27年8月22日(土)向日市民会館第1会議室にておいて、第130回埋蔵文化財セミナー「京都『交流』の考古学－縄文・弥生・古墳時代の交流史－」をテーマとして、基調報告・シンポジウムを行った。



第130回埋蔵文化財セミナー会場風景

このセミナーは、11月29日に開催した当調査研究センター設立35周年記念講演会・シンポジウムに先立って実施したものである。記念講演会・シンポジウムは奈良時代から中世を中心としたので、それ以前の交流の実態を明らかにすることを狙いとした。

基調報告1 加藤雅士主任「縄文時代の“京都”における交流－主に府内の遺跡からみた地域間交流－ 縄文時代の土器、石器、そして各種の遺構から広域、狭域にかかわらず地域間交流があったことを明らかにしたうえで、その背景に婚姻関係のネットワークが基本となり、交流を生んだという報告がされた。

基調報告2 肥後弘幸課長「弥生時代の“京都”における交流－新しい文化の伝来とクニの誕生－ 弥生時代に入り、朝鮮半島を中心とする地域から稲作文化が伝わり、各地にムラが誕生した経過が報告された。そして、ムラを中心としたネットワークが広がり、やがてクニが誕生する政治的交流のあり方が報告された。

基調報告3 細川康晴課長補佐「古墳時代の“京都”における交流－日本海と瀬戸内を結ぶ道－ まず、古墳時代の出土品を国内の流通と東アジアからもたらされたものという観点から検討した。そして、丹後・丹波・山城地域における副葬品や埋葬施設などを中心に各地域での交流の違いを明らかにした。

シンポジウム 当調査研究センター石野博信理事が、丹後地域の文化や出土品を中心に東アジアとの交流を中心に発表した後、コーディネーターを務めた。討論の概要は次のとおり。会場の方からも多く質問が寄せられ、白熱する討論会となった。当日は94名の参加者を得て、盛況のうちに無事終了することができた。

〈シンポジウム討論の記録〉

石野理事：京都の縄文時代晩期に東北系の土器が搬入されたという話でしたが、東北の人が来たのか、京都の人が東北から持ち帰ったのか、いずれでしょうか？

加藤：京都で東北系の晩期の土器が出土するのは5遺跡くらいで、1遺跡から2～3点という状況です。破片で出土するのが特徴です。近畿の晩期の土器は無文様化していきま

すが、東北系の土器は非常に文様が美しい特徴があります。東北で作られた精巧な文様自体に他地域の人が価値を見いだして、伝えたのではないのでしょうか。

石野理事：東北系の晩期の土器の胎土は、在地の胎土でしょうか？

加藤：逆のパターンになりますが、東北の方が縄文晩期の奈良県橿原遺跡出土の特徴的な文様のついた関西系の土器が山形で出土したというので見せていただいたところ、地元奈良の土と少し違うと感じました。必ずしも地元で作っているということはないと思います。

石野理事：旧石器時代には瀬戸内型系のナイフ型石器と同じ作り方のものが山形で出ています。日本海を通じての交流があるのですね。

加藤：北近畿の晩期前半の土器型式の成立にあたっては北陸系の土器の影響を強く受けていると思います。ただ、東日本や瀬戸内の影響も受けており、必ずしも一方通行ではないということです。

肥後：弥生土器の場合、民芸品として持ち込まれるというより、特産品を運んできたという可能性が考えられますが、縄文時代ではどうですか？

加藤：直接東北から来ている場合だけでなく、どこかを經由して来ている可能性もありますので、最初の段階で土器の中に何か入っていた可能性はあると思います。

石野理事：東北では縄文時代に限らず、アスファルトというものが接着剤として使われており、九州までの広い地域でアスファルトのついたものが出ていますが、京都府内でもアスファルトのついた矢じりなどは出ていますか？

肥後：私の知っている限りではないと思います。

石野理事：日本中で使われているものが丹後にはないということは独特な地域だということでしょうか。では、弥生時代に関して質問はありますか？

加藤：肥後さんの円窓付土器の話の中で丹後と東海の結びつきが強いということでしたが、どのようなルートで繋がったのか、なぜ途中の山城地域が抜かされたのでしょうか？

肥後：京都府内では、円窓付土器は亀岡市、南丹市、舞鶴市で出ているので、丹後半島を中心とした交易ルートを大きな観点で見たいと思います。また、後期では頻繁に東海系土器が出土するので東海ルートの存在も考えられます。東海から滋賀県を経て、淀川水系を通過して園部盆地から加古川流域、加古川から由良川流域へ上がっていくというのが一番考えやすいルートです。



コーディネーター 石野博信理事

石野理事：滋賀県の遺跡というのは、琵琶湖の東西南北のどこに多いのでしょうか？

肥後：琵琶湖の湖東で三遠式銅鐸の道と重なるところです。ただ、円窓式土器は中期の土器で三遠式銅鐸は後期のものなので時間差は考えないと思います。

石野理事：琵琶湖の南から丹後ではなく、京都盆地に入っ

て桂川を遡ってというルートですか？

肥 後：円窓式土器は亀岡盆地で出ているので、そのルートだと思います。

石野理事：パレススタイルの壺という有名な弥生後期を中心とする東海系の土器が、兵庫県但馬で見つかっています。愛知県から琵琶湖周辺を遡って日本海経由で但馬へ行き、円山川を遡って入って



シンポジウムの様子

きたのかと想像していましたが、東海系の文化が西へ動く場合にも琵琶湖の南から京都の南を遡って福知山経由ということもあるということですか？

肥 後：京都府は淀川水系と由良川水系の分水嶺が高いため、接点が少なく、南部と北部がすっきりと繋がらないのです。ですから、福知山ではなく、園部から篠山経由で加古川から由良川というルートでもたらされたと思います。

石野理事：そのようなルートもありうるということですね。肥後さんの話の中で方形貼石墓がありましたが、丹後の弥生時代後半のお墓の作り方は石貼りの四角い墓で、角は突出していない日本列島の中でも特色を持ったお墓の作り方です。そのような墓が出雲を中心とした四隅突出墓と一体と考えるのか？丹後独自に発展したのか？出雲の四隅突出墓よりも四隅の出ている方形貼石墓が丹後で先に生まれていたと考えるか？また、先程肥後さんは朝鮮半島との関係をお話しておられましたがどう思われますか？

肥 後：中期の貼石墓は点的に日本海側に分布しており、交流というよりは出発点がどこかにあり、その場所との交流が発生するのではと考えます。しかし、朝鮮半島との関係も深く考えるべきだと思います。

石野理事：朝鮮半島で日本の弥生時代中期の始めくらいに該当する貼石墓はありますか？

肥 後：墓として確かなものはないのですが、墓の外装施設として大きなものや、配石墓で部分的に紹介されている資料が見つかりつつあります。

石野理事：日本列島にないとどこにルーツがあるか探す必要はありますし、探して見つからなければ丹後にルーツがあるのかもしれないですね。弥生時代と古墳時代の境目の邪馬台国時代の墓、鏡は京都府下に集中して出土します。なぜでしょうか？

肥 後：鏡の流入経路ですが、この時代の丹後の人達がヤマト王権の大使節団の一員として中国に渡って、画文帯神獸鏡や三角縁神獸鏡をもらってきたのではないかと考えます。

石野理事：それらの鏡は中国の年号が入っており、その年代に邪馬台国があったという歴史的には重要な鏡です。鏡の出土した墓は小さな墓が多く、なぜ、歴史を考える上で大事なものが小さな墓から出土するのか？丹後の人はいいものを多く持っていたのか？いいものという意識がなかったのか？または、ヤマト政権が丹後の支配者に下賜品として渡し、それを丹後の支配者が自分の支配下の人に下賜したという意見もありますがどうですか？

細 川：三角縁神獸鏡について日本製なのか、中国が冊封体制の中で卑弥呼に下賜するために作

った特別製の鏡なのか、議論が分かれるところです。もし、大田南2号墳の画文帯神獸鏡が公孫氏の政権から有力な地域の人が朝貢してもらった鏡ということになると、三角縁神獸鏡以前の初期ヤマト政権の原型となるようなまとまりが鏡の分布から浮かびあがります。なぜ小さな古墳が多いかという、公孫氏政権との関わりの中で丹後の地域の有力者が有力なまとまりの中に入り、鏡をもらったあとに一時的に初期ヤマト政権から外された時期に作られたからではないかと思います。

石野理事：いろいろな解釈があるのですね。古墳時代に関する質問はありますか？

肥 後：古墳時代においてヤマト王権と豪族との関係はどのようなものだったのでしょうか？

細 川：瀬戸内の人々は鉄を蓄えて、力を蓄えていきます。利害関係が一致した勢力はヤマトを中心として独占的に国家として統制していこうとします。朝鮮半島の動乱にヤマトの連合政権や豪族も戦いに行き、負けることで大きな打撃を受け、一つにまとまっていた勢力は弱くなり、反乱が起こります。また、朝鮮半島の動乱の際にいろいろな人や新しい技術も入ってきて技術革新が起こり、出土品にも独自性を表してきます。

石野理事：古墳時代の国際関係というものは本当に緊密になっていきます。京都府下の古墳時代のものでも直接朝鮮半島系のもものはどのようなものがあるのでしょうか？

細 川：京丹後市のカジヤ古墳の筒形銅器は金官国で日本の出土量を上回っており、朝鮮半島製の可能性があります。京丹後市の穴ノ谷1号墳の鉄釧は鉄を折り曲げて作られており、このような技術を朝鮮半島の動乱のときに直接持ち帰ったものかと考えられます。

石野理事：京丹後市の大耳尾2号墳の角杯形須恵器というものがありますが、角杯というものは騎馬民族系のもので、朝鮮半島から出土し、日本海沿岸でもよく出土しています。では最後に、会場の皆さんからの質問で何かあればお答え下さい。

加 藤：縄文時代に海外との交流はあったのかという質問をいただいています。縄文時代前期を中心とした球状耳飾りは最近の研究や形の分析などから中国大陸または朝鮮半島からの影響が考えられます。また、石のこも用途は分かりませんが、朝鮮半島と北部九州で出土しており、朝鮮半島と九州で交流があったのではとされています。ただ、言葉が通じなかったという意見もあり、大陸や朝鮮半島との交流は、日本列島内での交流のあり方と比べると乏しいと思います。

石野理事：他に、タイムトンネルで見るとしたら何年ごろのどの地域ですかという質問がありました。私は卑弥呼に会ってみたいとも思いますが、東北出身なので一度東北の英雄である阿豆流為あてるいに会ってみたいと思いました。会場の皆さん、パネラーの皆さんどうもありがとうございました。

(おかむら・みちこ＝当調査研究センター調査課企画調整係調査員)

くぐそう 14. 久々相遺跡第12次

所在地 向日市寺戸町久々相

調査期間 平成27年1月22日～3月5日

調査面積 160㎡

はじめに この調査は、府道上久世石見上里線の防災・安全交付金事業に伴い、乙訓土木事務所の依頼を受けて実施した。今回の調査地は、当該地の現府道(旧西国街道)に接する南北に細長い調査区である。久々相遺跡は、これまで11回の調査が実施され、縄文時代から中世にいたる遺構・遺物が検出されている。主な遺構に飛鳥時代から平安時代にかけての建物群(第1次調査)、長岡京跡の東一坊大路延長道路の東・西側溝(第5・6次調査)、古墳時代から中世にいたる古寺戸川の旧流路(第7次調査)、旧西国街道に沿った溝(第10・11次調査)などがある。今回の調査は、第1次および第5・6次調査地に近く、飛鳥時代から平安時代の柱穴群や道路側溝などの検出が予想された。

調査概要 現代の盛り土直下で、黄褐色シルトの遺構面を検出した。その面から17基の柱穴、9本の溝を確認した。柱穴はトレンチ南側、溝はトレンチ北側から検出し、トレンチ中間部は後世の削平を受け、遺構を確認することはできなかった。溝9本のうち、6本は真東西方向の溝、残り3本は東西方向に対して主軸を北方向に大きく振る溝である。振る溝は真東西の溝に先行して掘られ、奈良時代の須恵器・土師器が多量に出土し、瓦片も含まれる。東西方向の溝からは奈良時代の土器が微量出土した。南側の柱穴群の

平面形は隅丸方形および円形・楕円形で、大きさは直径および一辺が0.15～0.35m、深さ0.05～0.3mを測る。柱穴内からは、飛鳥時代の須恵器もみられるが、主体は奈良時代のものである。

まとめ 今回の調査では、奈良時代の真東西方向の溝、飛鳥時代から奈良時代の真東西に対して角度を振る溝および柱穴群を検出した。一部の溝および柱穴に飛鳥時代の須恵器を若干伴うが、遺構の主体は奈良時代で、長岡京跡北辺条坊(推定)以前の土地利用を示している。

(黒坪一樹)



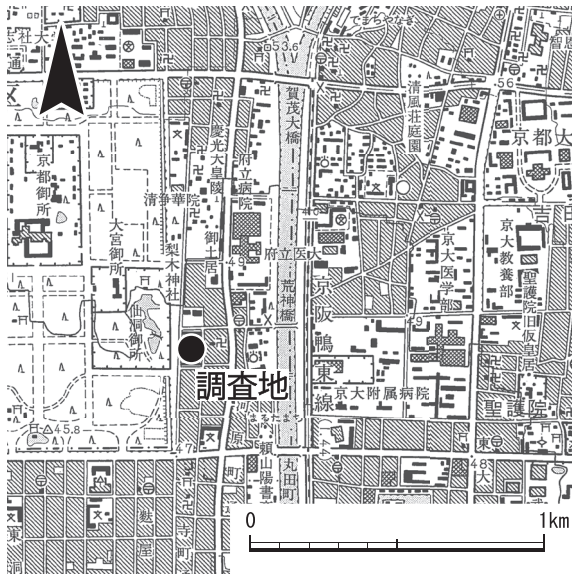
調査位置図(国土地理院 1/25,000 京都西南部)

てらまちきゅういき ほうじょうじあと
1. 寺町旧域・法成寺跡

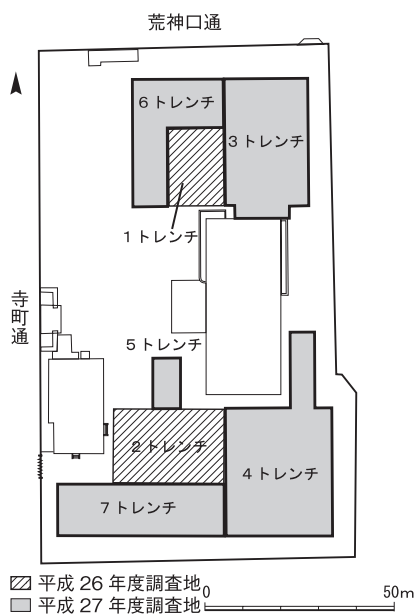
所在地 京都市上京区寺町通荒神口下ル松陰町131他

調査期間 平成27年2月3日～7月31日

調査面積 3,670m²



第1図 調査地位置図
(国土地理院 1/25,000 京都東北部)



第2図 トレンチ配置図

はじめに 今回の調査は、府立鴨沂高等学校改築等工事に伴い、京都府教育委員会の依頼を受けて実施した。調査地は、京都御苑の東に位置し、寺町通と荒神口通に面する。この地域は、藤原道長が寛仁4(1020)年に創建した法成寺の境内付近と想定されている。また、豊臣秀吉が天正18(1590)年に、京都市中に散在していた寺院を移転させて形成した寺町の範囲に位置する。寛永14(1637)年の「洛中絵図」では、調査地には革堂行願寺、専念寺、常念寺があったとされる。これらの寺院は、宝永5(1708)年の大火によって焼失、移転している。平成26年度前半の調査では、寺院に伴うとみられる礎石建物

や柱穴列のほか、石積土坑などを検出した。調査は、平成26年度前半の調査区を1トレンチ、2トレンチとし、今回新たに3～7トレンチを設けて実施した。

調査概要 16世紀末から18世紀初頭の遺構とみられる、墓地、柱列、井戸、溝、土坑などを検出した。

3・6トレンチ 先述の絵図によると、革堂行願寺の境内に想定される。宝永の大火後とみられる瓦を投棄した土坑、底部に丸瓦が列状に並べられた溝、石室などを検出した。トレンチ全体が校舎の基礎による削平を大きく受けており、寺院に伴う建物跡は確認できなかった。

5トレンチ 調査地北側で溝3条、土坑を検出した。溝は、東西方向に平行に延び、溝と溝の間は踏み固められている。寺院と寺院の境界の道路ないしは、通路と考えられる。それ

に伴うような柱列、柵列は確認されなかった。

4 トレンチ 寺院に伴う墓地、墓碑を投棄した土坑、土師器皿を投棄した土坑、井戸などを検出した。墓地は4 トレンチの北側3分の2ほどの範囲にひろがり、検出した墓坑は328基である。墓坑は南北方向に列をなすように掘られている。1列に15~20基の墓が並び、長さは約10mを測る。2列1組として墓群を形成している。墓群と墓群の間には、0.3~0.5mの空間があり、墓道と想定される。墓坑は、平面形は長軸1m程度、短軸0.7m程度の円形または、楕円形を呈し、深さ0.3~0.9mである。葬法の多くは土葬で、遺存状況は不良であるが、釘の出土状況から木棺が多いとみられる。また甕棺の他、火葬に伴う蔵骨器が数点出土している。墓坑からは、肥前陶磁器、銅銭、煙管、不明木製品、数珠、犬形土製品、人形、鉄製品などが出土している。また、4 トレンチ全体から746点の墓碑が出土した。出土した墓碑は一石五輪塔、板碑、舟形碑、別石五輪塔などで、戒名や年号が判読できるものも多く含まれる。数点がまとめて出土しており、宝永の大火後、寺院の移転に伴い投棄したものが多いと考えられる。土坑1では、一石五輪塔や板碑形の墓碑を互い違いに組んだ形で埋納されていた。井戸1は石組の井戸で、墓碑を用いている。井戸枠として使用された墓碑は、半分ほどの大きさに割られている。



写真1 4 トレンチ(西から)



写真2 土坑1(北から)

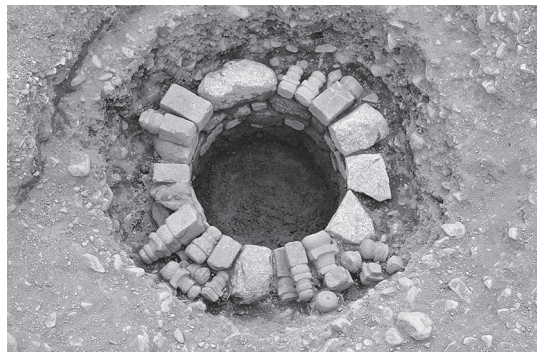


写真3 井戸1(東から)

7 トレンチ 寺院に伴うとみられる石敷、石列、溝、土坑、井戸などを検出した。また、宝永の大火直後に瓦、土器を廃棄したとみられる土坑を検出した。石列は東西方向に直線状にならんでおり、その周囲に石列が敷かれている。

前述の遺構面の調査後、重機による下層の確認作業を行ったが、鴨川の河川堆積による礫層が続いており、遺構面は確認できなかった。しかし、礫層中からは中世の瓦や土器片に混じり、平安時代の瓦が出土している。法成寺に使用されたと考えられる緑釉瓦もわずかに含まれている。

まとめ 4・7 トレンチは先述の絵図から専念寺ないし常念寺にあたと推定される。今回、寺院境内の大部分を調査することができ、寺院裏手にあたる4 トレンチで墓地を検出した。南北方向に整然と並び、計画性を持って墓地造営が行われたことが明らかになった。今後、秀吉が形成した寺町の景観、京都市内の墓制・葬制を考える上で大きな成果と言える。(綾部侑真)

やまだくろだ
2.山田黒田遺跡第4次

所在地 与謝郡与謝野町下山田地内

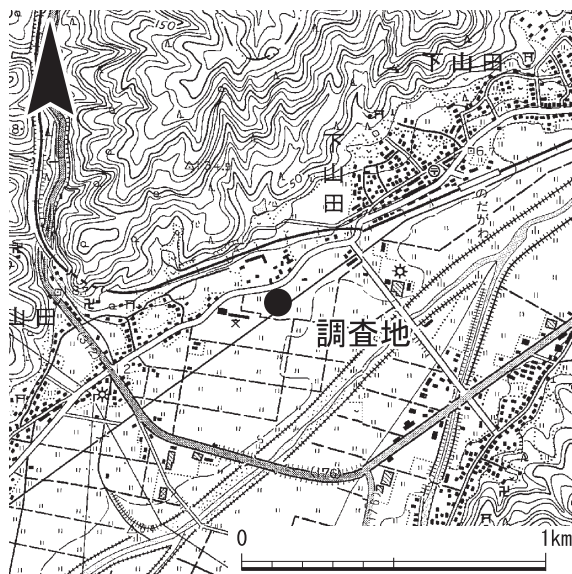
調査期間 平成27年7月21日～8月26日

調査面積 53㎡

はじめに 山田黒田遺跡は、野田川左岸河岸段丘裾の平地に立地する集落遺跡である。これまでの調査(第1～3次)で、柱穴の検出と弥生時代から古墳時代、平安時代の土器の出土が報告されている。今回、この地で京都府丹後土木事務所による平成27年度主要地方道宮津養父線道路緊急安全確保小規模改良(交安)工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査概要 調査対象地の土質は砂で、湧水を含んでいた。調査地は全長22.0m、幅1.5～3.2mと狭長であり、調査の安全を考慮しグリッド調査を行った。当初のグリッドは間隔を空けて7か所(第1～第7グリッド)を設定した。調査を終えたグリッドは安全上その都度埋め戻しを行った。その後、第1～第6グリッド間(第8～第13グリッド)においても調査を行った。

調査地の基本土層は、耕作土直下から地表下1.2m(海拔6.8m)付近まで、灰黄褐色から灰色系の砂・粗砂と灰色系シルト質細砂のラミナ層である。地表下約1.2～1.8m間は灰オリーブ色粗砂とオリーブ黒色シルト質砂のラミナ層である。地表下約1.8m(海拔6.2m)～2.5m間は黒色シルト(粗砂混じり)層である。さらに下層には明るい黒褐色粘質砂(無遺物)が堆積する。第3次調査で柱穴が検出された灰オリーブ色粗砂ラミナ層の上面で精査を行った結果、北端に設けた第1グリッドから大小のピット3基、南側第2グリッドから1基のピットを検出した。ピットが掘り込まれた灰オリーブ色粗砂を主とするラミナ層の調査では、主に古墳時代の土器が出土した。古墳時代前期の土師器の下から後期の須恵器杯身が出土する状況もあり、遺物の多くは2次堆積物とみ



調査地位置図(国土地理院 1/25,000宮津・四辻)

られる。さらに下層の黒色シルト層では、弥生時代中期～古墳時代前期の土器が多量に出土した。

まとめ 今回の調査では、建物等の遺構の検出には至らなかったが、ピットの検出は、調査地北側の河岸段丘上に集落が存在する可能性を高めた。また、下層の黒色シルトの堆積が弥生時代後期から古墳時代前期であることが明らかとなる成果を得た。今後、周辺部での発掘調査の機会が得られれば、山田黒田遺跡の内容等がより明らかになると期待される。

(竹原一彦)

にようきた 3. 女布北遺跡第 7 次

所在地 京丹後市久美浜町女布

調査期間 平成27年7月21日～8月28日

調査面積 200m²

はじめに 今回の調査は平成27年度府営農業競争力強化基盤整備事業に伴い、京都府丹後広域振興局の依頼を受けて発掘調査を実施した。女布北遺跡は佐濃谷川中流域右岸に形成された河岸段丘上に位置する。平成5年度に当調査研究センターによって発掘調査が実施されており、縄文時代から平安時代にかけての複合遺跡であることが確認されている。

調査概要 調査はほ場整備事業の切土によって削平される現在の水田面にトレンチを設定した。調査では上層と下層の2面の遺構面を確認した。

上層では調査区中央部東側で土器溜り、掘立柱建物跡、柱穴を検出した。土器溜りは平面が不定形な楕円形である。黒色土器碗・皿、土師器甕、白磁碗などが出土した。掘立柱建物跡は建物南西隅にあたる柱穴を検出し、平安時代後期の遺構と考えられる。いずれの柱穴にも柱根が残存していた。また、柱穴埋土から黒色土器片が出土しており、土器溜りと同時期と考えられる。土器溜り下層より柱穴を検出した。柱穴は柱根が残存しており、埋土より黒色土器片などが出土した。柱穴は前述の掘立柱建物跡とは別の掘立柱建物を構成している。いずれの遺構も調査区外の東側に広がるため、規模は不明である。

下層では、調査区北側より杭列と自然流路を検出した。調査区南側より杭列と柱穴4つを検出したが、建物の復元はできなかった。

まとめ 平安時代後期の掘立柱建物跡2棟と土器溜りを検出し、下層では杭列と自然流路などを検出した。遺構の全容は不明であるが、平安時代後期の黒色土器の出土量と、同方位の掘立柱建物が複数棟築かれたことは、当地域の歴史を考察する上で特筆される。(福山博章)



調査地位置図(国土地理院 1/25,000久美浜)

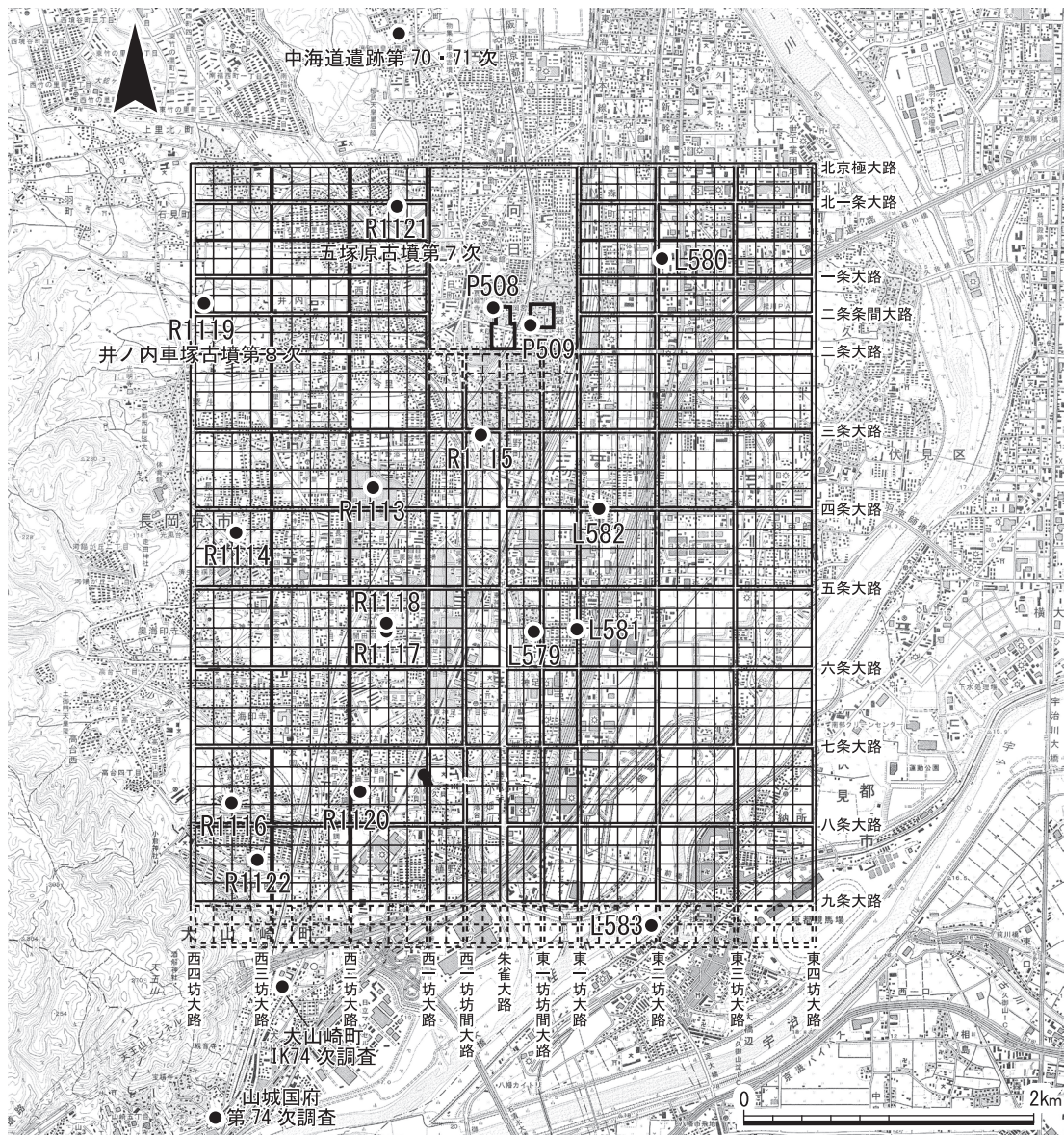


調査区遠景

長岡京跡調査だより・124

長岡京跡における発掘調査の情報交換および資料の共有化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月1回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を実施している。平成27年6月から10月の例会では、宮域2件、左京域5件、右京域10件、京域外4件の合計21件の調査報告があった。その中で、主要な事例について報告する。

宮域 第508次調査(向日市鶏冠井町)では、大極殿と小安殿が配置された大極殿院の調査が実施された。北西部の調査区では、院を取り囲む回廊北辺の礎石据付け穴8基と幅約1mの凝灰岩抜き取り痕跡が2条確認され、回廊基壇の幅が27.5尺(8.15m)であることが追認された。礎石抜



調査地位置図 (1/50,000)

(向日市文化財事務所・(公財)向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復原図を基に作図)

調査地はPが宮域、Rが右京域、Lが左京域を示し、数字は次数を示す。

き取り痕跡は、径1.2m・深さ0.1mを測り、東西12尺(3.6m)・南北8尺(2.4m)の柱間の複廊型式で検出された。小安殿の西隣接地では、大極殿院内郭の石敷を確認し、その標高が31.4mであることが判明した。また、長岡宮整地土の下面で埴輪片(蓋形)を含む溝の存在が認められ、近在する山畑4号墳と同時期の古墳が複数基存在することがわかった。この大極殿院の東に置かれた第二次内裏において、囲画施設である西辺の築地回廊について、第509次調査(向日市鶏冠井町)が実施された。築地本体は削平されていたが、築地の内外寄柱と東西廂柱の掘形が検出された。

左京域 第579次調査(長岡京市神足)では、上層において鎌倉時代の柱穴多数と、これを区画する「L」字状に折れ曲がる溝が、下層で方形周溝墓の周溝と埋葬施設(長方形土坑)が検出された。第580次調査(向日市鶏冠井町)では、幅1.3~1.7mを測る二条条間北小路の南側溝が検出され、墨書土器を含む土器や瓦類がまとまって出土した。既知の成果と併せ、この南側溝は「旧東院」内部を通過し少なくとも5町分が連続的に検出されたことになる。下層では方位に斜交する方向に古墳時代以前の流路が検出された。第581次調査(長岡京市神足)では東一坊大路に関わる路面硬化土が約20cm確認された。その下面では弥生~古墳時代の土坑や流路が確認された。第582次調査(向日市上植野町)地点では、南北方向に延びる旧小畑川の流路が確認された。内部から古墳時代の木製槽が古式土師器とともに出土した。現在の桂川河川敷に位置する第583次調査(京都市伏見区淀)では、7月16日に西日本を通過した台風11号にともなう増水で姿を現した淀城に関連する石列や護岸・木樋などの記録調査が実施された。

右京域 第1113次調査(長岡京市長岡)では、近世の土坑墓、長岡京期の四条条間南小路の北側溝と宅地内における方形土坑、古墳時代の木棺墓・甕棺墓・掘立柱建物、弥生時代中期の土坑などが検出された。古墳時代の木棺墓は墓壙の長軸最大2.6mを測り、墓壙内に小口穴をとどめる。第1115次調査(向日市上植野町)地点は小畑川の氾濫原にあたり、北西から南東方向に延びる礫敷および、14世紀の出土土器を下限とする河川堆積層が確認され、小畑川の河道変遷を検討する上で資料を得ることができた。第1117次調査(長岡京市開田)では、西二坊坊間小路の両側溝とそれに面する宅地域で掘立柱建物や柵・土坑などが検出された。道路の西側溝は大規模(幅5~7m・深さ1.2~1.4m)で、「大」「福」「□器」墨書土器や移動式竈を含む多量の土器類・加工木・神功開寶・凝灰岩片などが出土した。第1118次調査(長岡京市開田)では、六条条間小路の南側溝が確認された。第1119次調査(長岡京市井ノ内)では、古墳時代後期の全長約39mを測る前方後円墳の井ノ内車塚古墳の調査が実施された(第8次)。その結果、前方部前端側の墳丘基底は、規模の小さい溝により整えられている様子が判明した。西側の造り出し部は、後円部側に偏った位置に全て盛土により造成され、北辺斜面と後円部墳丘の接続部付近で、多量の埴輪類が出土する状況が確認された。乙訓地域で最古の横穴式石室が確認された京都市芝1号墳と近接し、同様の埋葬施設の存在を示す成果も得られた。埴輪には円筒のほか、これまで確認されている多様な形象埴輪群に加え、新たに鶏形埴輪の存在が確認された。第1121次調査(向日市寺戸町)では、五塚原古墳の範囲内容確認調査の一環として後円部の調査が始まった(第7次)。

(伊賀高弘)

現地公開状況(平成27年7月～10月)

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様へ報告し、地域の歴史を理解していただくため、当調査研究センターが発掘調査をしている京都府内の遺跡の現地説明会や遺跡見学会などの現地公開を行っている。

遺跡見学会

10月2日(金)、亀岡市佐伯遺跡で亀岡人権交流アフタースクールの児童8名、大人5名を対象に遺跡見学会を実施した。

関係者説明会

10月7日(水)、亀岡市三日市遺跡で地元説明会を実施した。

28名の参加者があった。



下水主遺跡第8次調査 氾濫流路



下水主遺跡第9次調査 古墳時代の溝

現地説明会

9月6日(日)、城陽市の下水主遺跡で第8次調査の現地説明会を実施した。

今回の調査では、昨年度の調査(第6次調査)と合わせて氾濫流路から多数の自然木とともに縄文土器が良好な状態で出土し、下水主遺跡の縄文時代晩期の様子がわかる大きな調査成果について公開した。

また、同時に調査中の第9次調査地についても、調査地の一部を公開した。古墳時代初頭の溝について説明を行った。

当日は小雨だったが、114名の参加があった。

(岡村美知子)

普及啓発事業（平成27年7月～10月）

当調査研究センターでは、埋蔵文化財発掘調査の成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくため、埋蔵文化財セミナーや小さな展覧会をはじめ、「関西考古学の日」関連事業、向日市まつりへの参加などの普及啓発活動を行っている。

埋蔵文化財セミナー

第130回埋蔵文化財セミナーを8月22日（土）向日市民会館第1会議室で実施した。今回のセミナーでは「京都『交流』の考古学－縄文・弥生・古墳時代の交流史－」をテーマとして、基調報告・シンポジウムを行った（本号19頁参照）。

当日は94名の参加者を得て、盛況のうちに無事終了することができた。

京のまなび教室

7月21日（火）に長岡京市立長法寺小学校の「らくしんすくすく教室」にて4～6年生児童48名、ボランティア5名を対象に京のまなび教室「勾玉をつくってみよう」を実施した。まずは、勾玉の起源について学習し、実際に滑石を削って勾玉づくりを体験した。初めて体験する児童もいれば、3回目という児童も参加していた。単に勾玉をつくるだけでなく、勾玉の起源についての学習により、古代の勾玉自体の意味を考えながら、ひとりひとりが独創的な形を考え、丁寧につくることができた。



長法寺小学校 勾玉づくり

出前授業

9月12日（土）向日市立向陽小学校の向陽小学校PTA秋まつり～親子のつどい「行こうよう！秋まつり2015」において『拓本をしてみよう！』を実施した。児童102名、保護者及び教職員3名が参加し、まず江戸時代後期の小菊瓦の説明を聞き、実際に小菊瓦に触れて、画仙紙と拓本用の墨で拓本をとった。画仙紙を瓦に定着させるのが少し難しいようだったが、小菊の模様が出てくると「すごい！」と感嘆の声が聞



向陽小学校出前授業 小菊瓦拓本



山城高等学校出前授業

かれた。

10月17日(土)に校舎の下に平安時代の貴族の館の門跡が保存されている京都府立山城高等学校で生徒60名、教職員2名を対象に村田和弘主査が出前授業を実施した。午前2回の授業で、発掘調査の方法と発掘調査成果の学習を通して、生徒たちにとっては、教科書では学ぶことのできない身近な歴史を学ぶ機会になった。また、実際に山城高等学校で出土した遺物に触れることにより、自分たちの学校の歴史に関心を持つことができた。



夏休み考古学体験講座 勾玉づくり

関西考古学の日2015

8月5日(水)・6日(木)に向日市文化資料館にて「夏休み考古学体験講座-勾玉づくり-」を実施した。乙訓地域の小学4年生以上と保護者193名が参加し、勾玉の起源について学習したうえで、勾玉づくりを体験した。親子や友だち同士で協力しながら、いろいろな形にできあがった勾玉を顔料で着色してオリジナルの勾玉をつくった。昔のひとの勾玉への想いを身近に感じていただけるひとときとなった。



秋の考古学講座 「古代東アジアから見た環頭大刀」

「秋の考古学講座」は当調査研究センター研修室にて2回の講座を行った。10月3日(土)は菅博絵調査員が「古代東アジアから見た環頭大刀」というテーマで講演し、25名の方々に聴いていただいた。また、10月31日(土)には小池寛参事が「古代東アジアから見た前方後円墳」というテーマで講演した。25名の方々が参加し、熱心な質疑があった。

(岡村美知子)

センターの動向

(平成27年7月～10月)

月 日	事 項
7 21	山田黒田遺跡（与謝野町）発掘調査開始 女布北遺跡（京丹後市）発掘調査開始 京の学び教室 らくしんすくすく教室「勾玉をつくってみよう」（於：長岡京市立長法寺小学校 参加者 53 名）
7 23	長岡京連絡協議会
8 5	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日 2015」当調査研究センター夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」（於：向日市文化資料館 第1回：参加者 42 名、第2回：参加者 46 名）
8 6	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日 2015」当調査研究センター夏休み考古学体験講座「勾玉をつくろう！」（於：向日市文化資料館 第3回：参加者 53 名、第4回参加者 52 名）
8 22	第130回埋蔵文化財セミナー「京都『交流』の考古学」（於：向日市民会館 参加者 94 名）
8 26	長岡京連絡協議会
9 6	下水主遺跡（城陽市）現地説明会（参加者 114 名）
9 12	向日市立向陽小学校 PTA 秋祭り「拓本をしてみよう！」（於：向日市立向陽小学校参加者 105 名）
9 16	長岡京連絡協議会
10 2	舞鶴市西公民館「郷土史講座」伊野近富副主査「舞鶴市大川遺跡の発掘調査」 佐伯遺跡（亀岡市）亀岡人権交流アフタースクール現地説明会（参加者 13 名）
10 3	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日 2015」秋の考古学講座 （於：当調査研究センター研修室、菅博絵調査員「古代東アジアから見た環頭大刀」参加者 25 名）
10 7	三日市遺跡（亀岡市）地元説明会（参加者 28 名）
10 11	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日 2015」記念講演会『お城の考古学』、引原茂治副主査「京の城郭・丹波の山城」（於：兵庫県立考古博物館）
10 17	出前授業（於：京都府立山城高等学校、村田主査 参加者 62 名）
10 28	長岡京連絡協議会
10 31	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック「関西考古学の日 2015」秋の考古学講座 （於：当調査研究センター研修室、小池寛参事「古代東アジアから見た前方後円墳」参加者 25 名）

訂正

平成 27 年 8 月に刊行しました『京都府埋蔵文化財情報』第 127 号の内容に誤りがありましたので、訂正してお詫び申し上げます。

『京都府埋蔵文化財情報』第 127 号

8 ページ本文 14 行目

誤（有限会社京都平安文化財）→正（京田辺市教育委員会）

関係各位にご迷惑をおかけしましたこと、深くお詫び申し上げます。

大変お手数をおかけしますが、同封いたしました訂正シールを、該当か所に貼り付けていただきますようお願い申し上げます。

編集後記

冬来たりなば春遠からじとは申せ、寒さがひとしお身にしみるこの頃ですが、今年度 2 冊目となる『京都府埋蔵文化財情報』第 128 号が完成いたしましたので、お届けします。

本号では、平成 27 年度の京都府内における埋蔵文化財の調査成果をいち早くお伝えするとともに当調査研究センター職員による論考、研究ノート、さらに 8 月に開催した「第 130 回埋蔵文化財セミナー」のシンポジウム報告、そして「関西考古学の日」に関連する事業報告などを掲載いたしました。

ご一読いただければ幸いです。

（編集担当 岡村美知子）

京都府埋蔵文化財情報 第128号

平成 27 年 12 月 28 日

発行 公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒 617-0002 向日市寺戸町南垣内 40 番の 3

Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒 604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル

Tel (075)256-0961 Fax (075)231-7141